



☆ 八千代市民文化祭 ふるさとの歴史展 ☆

テーマ「旧村のいま・大和田新田のすがたⅡ」

とき：11月24日(土)午後1時～5時 25日(日)午前9時～午後4時

ところ：勝田台文化プラザ 2階展示室

市制40周年記念・ふるさとの歴史展
旧村のいま 大和田新田のすがたⅡ
ごあいさつ

その昔江戸から成田へ、船橋を過ぎて広い大和田原をぬけ、新木戸に入るとそこは大和田新田のムラ。江戸へ通じる成田街道は文化・経済交流のルートでした。

近年、東葉高速鉄道の開通により新しいまち緑が丘や、ゆりのき台も生まれ、ムラを大きく変貌させました。江戸・明治・現代へと、そこに展開された確かな歴史をお伝えします。

- ◇旧家「白井家」に残る古文書から歴史を読み解く
- ◇開発による変遷をみる
- ◇掘り出された原始・古代の姿
- ◇酪農王国といわれた八千代・大和田新田
- ◇ムラの外にみる石造物
- ◇阿弥陀堂があった
- ◇旧村の伝統と新しいマチの姿
- ◇ムラに伝わるわらべうた
- ◇そして、会の研究活動のようす

調査研究ではたくさんのかたがたにお世話になりました、ありがとうございました。どうぞゆっくりご覧ください。

平成19年11月

八千代市郷土歴史研究会一同
会長 村田一男

お知らせ

☆12月16日(日)12月例会

大和田新田の歴史散歩と忘年会

集合場所 八千代台駅 改札口
午後1時30分(雨天決行)

今年最後の歴史散歩は、大和田新田の塚めぐりです。どんな塚があるかは、歩いてのお楽しみです。

その後は、八千代台周辺で恒例の忘年会を開催します。予約は平塚まで(会費4000円)

☆初春2008年1月6日(日)

などころ
浅草名所七福神めぐり

集合場所 浅草寺 雷門前 12時30分

京成電鉄勝田台駅 11:21 発、前方車両に乗車(なお、この電車は浅草着 12:08 ですが、昼食をとる余裕はありませんので、事前にそれぞれ適宜昼食を済ましておいてください)

新春の一日、下町情緒あふれる浅草の街並を、道筋にある石造物や旧跡を訪ねながらの九福神めぐり。

☆コース
浅草寺・浅草神社・待乳山聖天・今戸神社
・橋場不動尊・石浜神社・吉原神社・
鷲神社・矢先神社 (16:00) 解散予定

参加の方は必ず、12月例会までにお申し込み下さい。会員以外の方も歓迎(参加費500円)

1月13日(日) 拡大役員会

- ・ 午後1時～4時半 市立郷土博物館にて
- ・ 次年度調査研究課題の検討ほか

2月16日(日) 博物館共催事業

- ・ 八千代八福神開設20周年記念めぐり

3月16日(日) 歴史散歩

- ・ 通信61号でお知らせします

..... **報 告**

8月19日(日) 例会

八千代市立郷土博物館にて
参加者数24名(うち新会員1名)

- ・ 郷土史研通信59夏号配布

1.活動報告

- ①白井富美子家文書の解読研究
文書の解読研究でわかったこと
 - ・ 文書の種類と特色 (関和会員・菅野会員)
 - ・ 一筆限帳 (佐藤二郎会員)
 - ・ 明和2年 差上申一札之事 (酒井会員)
- ②酪農の調査
(佐久間会員・石井会員・斉藤会員)
- ③阿弥陀如来調査 (島山会員・関和会員)
- ④石造物調査
(小菅会員・園田会員・板倉会員)
- ⑤大和田新田所在の塚と大日如来像
(村田会長)
- ⑥埋蔵文化財調査から見た大和田新田の原始・古代の姿
(蔵会員)
- ⑦民俗行事に見る新しい町・大和田新田の姿
(蔵会員)
- ⑧その他

2.市民文化祭展示プラン

- ・ 11月24日(土)・25日(日)
- ・ テーマは「ふるさとの歴史展」旧村の今・大和田新田のすがたⅡ
(牧野事務局長)

**9月9日(日) 午前 役員会
午後 例会**

10:00～16:00 八千代市立郷土博物館にて

参加者数20名

役員会・例会

- (1)文化祭について
 - 1.今年から{郷土史展}を「ふるさとの歴史展」にする。
 - 2.ポスターに「八千代市制40周年記念市民文化祭」と冠を付ける。
 - 3.会場の費用負担は、1日目日本会負担、2日目基本料金市負担(昨年と同じ)
 - 4.文化団体補助金は昨年と同じ
- (2)機関誌第32号編集 表紙・目次等の検討
「特集1 大和田新田総合研究そのⅡ」
 - 1.「白井富美子家文書」文書解読研究・中間報告
 - 2.大和田新田の変遷
 - 3.大和田新田の酪農
 - 4.埋蔵文化財調査から見た原始と古代の姿
 - 5.大和田新田の塚
 - 6.石造物
 - 7.阿弥陀堂調査
 - 8.民俗行事に見る旧村の伝統と新しい街・大和田新田の姿
 - 9.特集2 道標拾遺(新発見 史研8,未掲載2件あり)

午後3時終了 後『史談八千代』編集会議

10月7日(日) 校正編集作業

会員19名が参加して市博物館で『史談八千代』第32号の校正作業と、文化祭展示の計画について検討しました。

10月27日(土) 最終校正作業

執筆者ならびに編集委員計11名により、市博物館において『史談八千代』の最終校正作業を行ないました。

「史談八千代」第32号が発刊!

特集「旧大和田新田の総合研究Ⅱ」
1冊500円
(会員には文化祭で配布、又は送付します)

取扱店
千葉県立中央博物館内ミュージアムショップ
ときわ書房(八千代台)
大杉書店(緑が丘)
文永堂(大和田新田)

高津の吉橋大師巡拝に参加して
浄園 恵子

9月15日(土)、16日(日)の両日、高津の皆さんが実施する恒例の吉橋大師巡拝に参加した。白衣にたすきがけ、杖を持ち腰に鈴を下げたお遍路さんの装いである。当日の巡拝者は17名、当会からは7名が参加し、うち2名は白装束を着用しての参加であった。

朝8時、高津観音寺に集まる。先達の吉橋春由さんに従って巡拝の無事を願って札所で読経、全



員マイクロバスに乗り高津観音堂、大教院、新木戸八幡社に向かう。途中道路工事の渋滞に巻き込まれ、やむなく道を変更、習志野演習所前から薬円台の高幡庵に着く。2日で八十八カ所を巡るため、世話役の配慮でバスは各札所の直近に横付けされる。下車後は大師堂に向かって一目散に歩き、ひたすらお大師さまにお詣りする。高津の皆さんが歩くと、揺れる鈴の音とお遍路姿に心が癒され、また励まされた。

飯山満に到着。光明寺は立派な山門のある寺だった。巡拝後バスの中で昼食。東福寺、薬師寺、ゆるぎ地藏に来ると山の上にある竹林を渡る風の涼しさや、たわわに実をつけたナツメの木に、しばし真夏のような暑さも忘れる。鎌ヶ谷から三咲の道は運転手さん泣かせの狭い道を走った。日暮れが近づく頃、巡拝は秋の日との時間勝負となり、鈴身町連蔵院の小さなお大師様に詣り、金堀地区に入る。藪の中、畑の道、笹のトンネルを抜け金堀観音堂で読経のち本日の「止め」となる。赤い夕日も一瞬のうちに闇に包まれていった。

二日目16日も、観音寺より朝8時出発。巡拝前に、昨年亡くなられた前先達さんのお宅へ伺い、お庭で読経。遺族の皆さんから手厚いもてなしを受ける。その後桑橋の薬師堂、安養院へと向かう。

高津の皆さんは70代、80代の方々が最高齢は92歳とのこと、しかしとてもお元気だ。車中では稲刈りが終わった田んぼのこと、畑の作物のこと、荒地がめだつ休耕田が次第に藪化していく様子などを教えて下さる。その言葉の響きがなつかしく胸に残った。さて新川を渡ると街の様子は一変して国道296号のガード下、車がひっきりなしに走る大変なところに札所がある。下町白旗社に巡拝後、市役所通りをぬけ最後の目的地、萱田飯綱神社観音堂に着く。先達さんのお導きで八十八カ所すべてを廻り終え、読経して結願となった。その後の直会(なおり)で話がはずみ、今年の吉橋大師

巡拝は無事終了となった。私たちの参加を心よく受け入れて下さった高津の皆様本当に有難うございました。

(なお、『史談八千代30号』に、斉藤君代さんが「高津における吉橋大師巡拝」として詳細記載があります。ご一読ください)

市立郷土博物館主催 文化財散歩
「あんば様を訪ねて」参加記

牧野 光男

11月4日(日)朝8時、博物館で受付を済ましてバスに乗り込む。参加者は40名、応募者は定員の2倍だったそうだ。バスは一般道を茨城県稲敷市(旧桜川村)阿波にある大杉神社へ向かう。今回は文化財としての神社彫刻と庶民信仰の「あんば様」のルーツをたずねるものだ。車中では館長の資料説明が始まる。大杉神社は平成8年から10年にかけて社殿の造営が行われ、本年10月に1240年の大祭が行われた。これに伴い神社の彫刻も社殿とともに極彩色に彩られ、参拝者の目を奪うものになっている。特に玉垣にある「二十四孝」の彫刻は知られたもので、



宮司の説明を受けたのちこれを順に見て回る。ここのほかに匝瑳市(旧八日市場市)の飯高神社のものが知られ、八千代市では飯綱神社の玉垣の「二十四孝」が市指定の文化財になっている。自由時間にご神体の大杉三郎・次郎を見る。確かにご神体といえる大杉である。大杉太郎は江戸時代に焼失してしまったが、その太さとして切り株が八畳敷きあったと伝えられている。地域特産の「蓮根」の昼食を済ませ、成田山新勝寺へ向かう。新勝寺の釈迦堂は旧本堂として、また五百羅漢の彫り物があることで知られているが、三箇所扉に「二十四孝」の彫り物があることは見逃されていることが多い。今回の参加者に本会の藤本会員が参加されていて、同乗の館長の指名で説明を引き受ける。参加者の多くは高齢者の中で最年少の藤本会員の説明に、納得しその知識に感心した様子である。時は過ぎ秋の陽は落ちるのが早い。帰路に向かいはや夕暮れとなった4時半に博物館に帰着し解散となる。一日天気に恵まれた文化財散歩であった。

歴博に展示中の「壺 G」と
八千代市の古代仏教遺跡との関連について
藤 由美

現在、国立歴史民俗博物館で企画展示「長岡京遷都一桓武と激動の時代」が12月2日(日)まで開催されています。

「古代日本において律令国家の転換点となった8世紀末から9世紀初めの桓武朝を中心とする時期に焦点をあて、その前後で国家と社会がどのように変化していったかを王権と都市(都城)をテーマとして展示します」という趣旨で、坂上田村麻呂像と向かい合った悪路王・アテルイの首が相對して展示されているように、「征夷」=東北戦争の軍事と行政の姿なども紹介されています。

さて、この企画展示では、八千代市から考古遺物が一つ出品されています。それは村上込の内遺跡から出土した「壺 G」と呼ばれる須恵器の長頸壺で、展示の最後のほうに長岡京や武蔵国府跡(府中市)、臼井屋敷・高岡大山遺跡(佐倉市)、墨木戸遺跡(酒々井町)、多賀城跡など関東・東北から集められた二十数点ほどの壺 G に交じって並べられていました。

壺 G は8世紀末から9世紀初頭に静岡県の花坂島橋窯と助宗窯で生産された長頸壺のことで、その「壺 G」という名は、奈良文化財研究所が壺 A からアルファベット順につけたやや珍しい須恵器壺の一つです。形は太型から中細～細型まで、少しだけ型式変化しますが、いずれも高さ20 cm位の細長い形で頸が長く、堅牢で優雅な形をしつつも、作りはやや雑です。

平城・長岡・平安京の旧都から東海・関東に多く分布し、東北の数か所の城や柵でも見つかることから、企画の趣旨としては、「特異な形式をもつ壺 G の移動に代表される物流の進展」を示し、長岡京とそのころの東北支配の拠点地と東日本で多く出土していることを強調しているようです。

展示プロジェクトリーダーの山中章氏の図録解説にあるように壺 G の用途は謎で、「堅魚煮汁容器説・水筒説・徳利説・花瓶(ケビョウ)説など諸説あって定まらない」、「自立しにくい製品が多く、ぶら下げて使用したと考えられる」とのこと。さらに入場者用リーフレットでは「桓武朝における東北遠征の軍事行動にともなう利用」を挙げています。

私は一輪ごしの花瓶がその形にふさわしく思え、歴博の「軍事携行品説」に疑問を感じていたところ、壺 G の本場静岡県で、この壺の研究をされている佐野五十三氏(静岡県埋蔵文化



寺家前遺跡(静岡県)
出土の壺 G

財調査研究所)に実物を見せていただきながらお話を聞く機会がありました。

佐野五十三氏の説も仏事使用の花瓶説で、渡岸寺(滋賀県)や法華寺(奈良市)など十一面観音像の古代の仏像の持つ花瓶の形に着目し、遠寺原遺跡(袖ヶ浦市)、十三宝遺跡(群馬県)、宮ノ前第2遺跡(韮崎市)などの仏教関連施設と推測される遺構からの出土例から、行基のような僧を介し仏教の東国へ伝播とともに広がったと推論されています。

八千代市域の壺 G は、村上込の内遺跡のほか、井戸向遺跡、北海道遺跡など萱田遺跡群から出土していますが、村上込の内遺跡では瓦塔・瓦鉢・燈明皿など、井戸向遺跡では、青銅製菩薩坐像・奈良三彩の小壺や「寺」「仏」の墨書土器、北海道遺跡では「勝光寺」・「尼」などの墨書土器などが出土し、8世紀末から9世紀代の仏教関連遺跡と考察されている注目すべき遺跡です。(笹生衛『神仏と村景観の考古学』2005)

また佐倉市の高岡大山遺跡も、「コ」の字にめぐる柱建物跡周辺から、高台付香炉、銅椀、「寺」の墨書土器が集中して出土していて、古代の寺院跡と推定されています。

これまで壺 G が仏具とされたことは、笹生衛氏の報告などこれまでの諸文献でもなかったようですが、仏教関連の考古資料のひとつと仮定してみると、八千代市周辺に限ってみても、時期的にも遺跡の性格からもぴったりと一致します。

壺 G については、なぜ産地限定で短命だったのか、東日本に分布が偏るのかなど、謎があるようですが、笹生氏の萱田遺跡群を対象にして考察した8世紀末～9世紀の集落における仏教伝播の過程(白幡前遺跡の郷単位の寺院→井戸向遺跡の有力氏族の持仏堂→北海道遺跡の民衆信仰レベルの小堂の成立)と、集落を構成する単位集団の変質に並行する9世紀第4四半期の

急速な消滅を考えることにより、その謎を解明する糸口が見えてくるように思えます。

この小さな壺に花一輪添えて仏前に供えていた村の人々。寺といっても村のささやかなお堂だったかもしれませんが、壺 G は目立たぬながらも八千代の古代の村の姿を豊かに想像させてくれる一品だと思います。

長岡京の企画展示を開催中の歴博に足を運んで、ぜひこの際、村上込の内遺跡の「壺 G」をご覧になってはいかがでしょうか。

人形大使「筑波かすみと『青い目の人形』

牧野 光男

平成 19 年 6 月から 8 月にかけて茨城県内 10 ヶ所で巡回展「人形大使『筑波かすみ』と『青い目の人形』展」があるという知らせに古河の展示会場へ行ってきました。

「青い目の人形」というと「青い目をしたお人形は アメリカ生まれの セルロイド・・・」の歌を思い浮かべる人も多いことと思います。この歌は大正 10 年(1921)に野口雨情作詞・本居長世作曲による歌で、広くうたわれ愛唱されました。

この青い目の人形の歌を連想させる人形が、全国の子供たちへのプレゼントとして昭和 2 年(1927) 3 月 3 日に船に乗って神戸や横浜の港にやってきました。その数 12,739 体で「友情の人形」と名付けられていた。人形達は自分の名前、パスポート、ビザ、友情の手紙、それに自分の着替えも持ってやって来たのです。これはアメリカのシドニー・ギュリック博士と博士と親しい日本の渋沢栄一両氏の力によるものだった。ギュリック博士は日本でキリスト教の布教のため 20 年滞在し、日本と日本人を良く知り深い親しみを持っていた。

当時のアメリカでは、日本からの移民は仕事を選ばず、低賃金でよく働く事で知られ、アメリカ人の仕事が奪われるとして「好ましくない外国人」として排斥しようという動きが高まっていました。博士は「世界の平和は子供たちから」をめざし、いろいろな国へ友情のプレゼントをおくる活動をしていました。アメリカの子どもたちから日本の子どもたちへ、親しみと友情の心をこめて人形を贈ることによって、アメリカと日本の平和がいつまでも続く事を願い全国に呼びかけた。それに答えて、アメリカ各地の小学校の子どもたちや、先生・お母さんたちによる手作りの帽子や洋服を着た人形が用意された。

日本では渋沢栄一は文部省や外務省にも協力を求め、受け入れの準備を整えた。3 月 3 日の「ひなまつり」の日に、東京青山の日本青年館で東京の子ども代表や日本に住むアメリカの子ども代表など 2 千人が集り、盛大な歓迎会が行われました。その後、全国の幼稚園や小学校へ送られ、そこでも歓迎会が行われた。当時の子どもたちは洋服を着て、体をまげると「ママー」と声を出す人形にびっくりしたという。



写真はアメリカから贈られた「メリー」ちゃん(古河幼稚園蔵)
足元には持参のバッグ、着替えの洋服が展示されている

「筑波かすみ」の話になります。日本でも青い目の人形のお返しに答礼人形を贈ることになった。全国の幼稚園、小学校の子どもたちから 1 人 1 銭の拠金があり、かわいい日本人形 58 体がアメリカに行くことになった。1 体 350 円もする豪華なもの(当時の先生の月給は 40~50 円)。人形は各都道府県・6 大都市・当時の領地の満州・朝鮮・樺太などに割り当てられた。人形づくりは日本一流の人が、衣装は一流のデパートで調えられた。名前も郷土に因んだ名前が付けられた。日本を代表する「倭日出子」北海道は「北海花子」長野は「長野絹子」東京は「東京子」などです。茨城県を代表する人形が「筑波かすみ」です。昭和 2 年 11 月のクリスマスに間に合う様に横浜港から出て、アメリカ各地で大歓迎をうけた後、各州の公立博物館や美術館に 1 体ずつ置かれた。「筑波かすみ」はウイソコンシン州ミルウォーキー市の公立博物館に飾られて「ミス茨城」と呼ばれていた。人形が持参したと思われるミニチュアのダンスや鏡台のほかたくさんのお小物、「桜の国から合衆国の小さな友人」あての手紙、「大日本帝国人形旅券」「日本郵船の 1 等切符」も。

その後、日米間には不幸な戦争があり、人形たちもその犠牲になり焼かれたり、壊されたりした。贈られた数は 12, 739 体の内 平成 19 年 3 月現在で確認できるものは 326 体であるという。

昨年 10 月、ミルウォーキー博物館学芸員とと

もに 79 年ぶりに里帰りをした「筑波かすみ」は



ミス茨城「筑波かすみ」ちゃん
(今にも草履を履いて歩き出しそうに見える)

いろいろ痛みも出てきていて「人形の吉徳」に入院し、丁寧に修復をされた姿で展示された。まるで幼児がそこに立っているように。修復の様子は会場のビデオコーナーで放映されていて、来館者は熱心に見入っていた。巡回展が終るとアメリカへ帰っていきます。再び不幸な事が起こらないことを祈りつつ。そしてまた日本への里帰りが出来るように想いを残して旅発ちます。

参考資料 企画展「人形大使『筑波かすみ』と『青い目の人形』たち」

大和田新田の石造物 拾遺

小菅俊雄 鈴木 登

大和田新田の石造物については『史談八千代』第 31 号に発表したが、その後の調査の際に発見された物、および、その後造立された物について報告する。

供養塔の部

No.121 地藏菩薩立像

所在地 大和田新田字平作 844
造立年月日 宝永 3 丙戌年 (1706) 10 月吉日
種類 供養塔、像容 刻像型、形状 丸彫り
銘文 左袖 宝永 3 丙戌年
右手の錫杖 十月吉日吉橋村願主
本体表面 奉造立地藏菩薩心願成就
蓮弁 右側 金左エ門他 2 名
正面 名前のような刻字
宝永元年 (1703) 十一月十日
左側 幻口童子

解説 宝永元年に何か願い事をして、それが叶ったので、宝永 3 年にそのお礼として造立したもののか。

No.122 無縁法界供養塔

所在地 大和田新田 94 シダックス右隣の空き地

造立年月日 大正 2 年 (1913) 3 月 15 日
種類 供養塔、像容 文字碑、形状 角柱型
銘文 正面 梵字 無縁法界供養塔
左面 大正二年三月十五日建之
台座 正面 金十五円 大和田新田上区一同発起人他 15 件
右面 金三円 大和田町萱田村運□□他 11 件
左面 金二円 大和田町萱田運送□□他 14 件
近在の運送連一同の名称が刻まれている。

解説 仏教界には法界とはすべての世界の意味となり、無縁佛の霊を慰めるために建立したものとされるが、土地の方の話によれば、その場所に少し小高い塚があったそうで、成田街道筋での運送業者が供養のために建立したと思われる。

社寺奉養物

No.232 社号標

所在地 神明社 門前
造立年月日 平成 19 年 (2007) 4 月吉日
種類 社号標、像容 文字碑、形状 角柱型
銘文 正面 神明社
裏面 奉納 白井善兵衛他 5 名
平成十九年四月吉日

新発見・道標データの追加

フ 07 石灯籠

- ・ 永代常夜灯
- ・ 「右 大わたみち」
- ・ 嘉永 5 年 3 月
- ・ 場所 船橋市立御滝中学校内 正門右側

チ 18 庚申塔

- ・ 角柱型文字碑
- ・ 「右ハ わう志う (?) 同よなもと道」
- ・ 場所 千葉モノレール作草部駅前

チ 19 供養塔

- ・ 光明真言百万遍塔
- ・ 「右ハ ながのま村よなもと道」
- ・ 場所 作草部交番前旧穴川中道曲がり角
- ・ 別名「なわしぼり塔」と呼ばれています。

編集後記

文化祭の展示が終わると、もうすぐ師走、あつという間に今年も暮れていきます。新春初散歩は、浅草の七福神ならぬ九福神めぐりです。大勢参加して福を呼び込みましょう。(T.H)